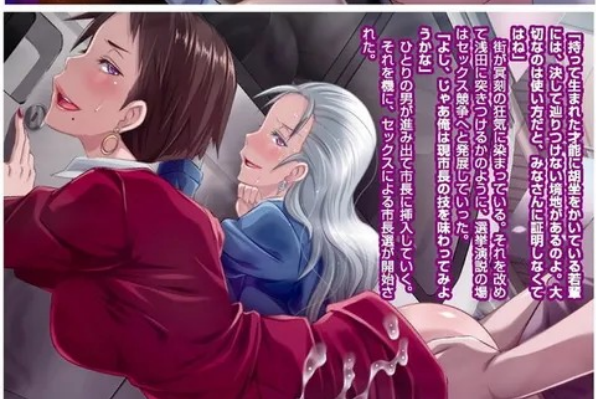


受胎する程魔の萌兆

真刻園

著 雑賀匡
画 プッチャーじ
原作 九条





細意を促す言葉も、彼女たちの耳には届かない。
 「教室でやるのがいけない」というのであれば、どこか遠う場所に移動しても構いませんよ。
 そこでセックスしていただけるのでしょうか？」
 「駄目に決まってるだろう！」
 クラスと笑う西園寺に、浅田は思わず声を荒らげてしまった。
 「どうですか？ もしかして、私が笑ったから……つまらないセックスしかできない
 と思ってるからですか？」
 「そ、そうじゃなくて！ 生徒と不適切な関係を結ぶと自体が駄目なんだ」
 「不適切って……セックスがですか？」
 「西園寺は不思議そうな顔をして首を傾げる。
 「そんな問題ありません。私は浅田先生とのセックスで、お腹にたっぷり精子を注
 いでいた……幸せになりたいと思ってるんですから」
 彼女の異常な言葉に、他のふたりも同意するように頷き合っている。
 「な、なんなんだ……これはっ？」
 これまであたりまだった日常が、音を立てて崩れていくような感覚だった。
 名門校の生徒とはいえ、彼女たちも年頃の女の子だ。異性には興味があるだろうし、若
 い男性教師が赴任してくれば、はしゃいでしまうのも無理はない。

いくら求められたからといって、教師がそんな要望に応えられるわけがない。
 「私、浅田先生のオチンチンが欲しいんです」
 「……なっ!?」
 艶やかな唇から漏れる卑劣な単語。
 彼女の口からそんな言葉を聞かされ、あまりの違和感に頬がクラクラとした。
 「ちよ……待って、西園寺！ 誰か……北太郎も、なんとか言ってくれ！」
 彼女の背後にいた女生徒たちに助けを求めた。
 西園寺は一時的におかしくなっているだけなのだ。クラスメイトたちの力を借りて、な
 んとか正気に戻してやらなければならぬ。
 混乱した頭で考えていたのだが。
 「あら、私たちも同じですよ？ 先生の精液をいただきたいと思っていますから」
 「そうですよね。あたしも欲しいです」
 ふたりの女生徒たちも、淫靡な笑みを浮かべながら近寄ってきた。
 「教室でそんなことできるわけないじゃないか！ 僕は教師なんだぞ？ そういうことを
 してはいけない立場だ……おまたちだつて理解しているだろう？」
 「そんなの、黙っていれば分かりませんよ」
 「他の人にバレないようにすればいいじゃないですか」

彼女の言葉は、とても信じられないものだった。
 この名門女学園の生徒であれば、決して人前では口にしないであろう言葉。
 「……い、セックスと言ったのか？」
 浅田は信じられない思いで、目の前に迫った少女を見つめた。
 クラス委員長を務める彼女、西園寺亜紀は、この学園に教師として赴任したときから、
 あれこれと手助けしてくれた真面目な女生徒だった。
 だが、いまの彼女は明らかに普段とは違う。
 正面から浅田に迫るつき、白い頬を紅潮させながら、熱っぽい瞳で見上げてくる。
 「聞こえませんでしたか？ 私は……先生とセックスをしたいんです」
 「な、なにを言ってるんだっ!?」
 浅田は思わず上唇をつたった声を上げた。

プロローグ



けれど、これは明らかに異常だった。

「先生は私の担任ですよ。だったら、苦しんでいる生徒を救ってください」

「あ、君がなにを苦しんでいるというんだ？」

「もちろん、性欲が満たされなくて……ですよ。セックスがしたくてしくて、こんなに苦しんでいるのに……」

「うっ!! ちよつと、そこは……」

彼女の細い指が、ズボンの上から男性器をまさぐってくる。慌てて腰を引こうとしたが、いつの間にか他のふたりが左右から浅田の身体を押さえつけていた。

いくら非力な少女とはいえ、二人が相手だと抵抗するのは難しい。

彼女たちは相変わらずセックスと笑いながら、浅田の尻や胸へと手を伸ばし、艶めかしい手付きで全身を撫で上げてくる。

「や、めないか、こんなこと……」

身体に触れてくる女生徒たちの柔らかなさ、鼻を刺激する甘い匂い。

こんな異様な状況にあるにもかかわらず——浅田の胸は性的な興奮によって高鳴り、自然と体温が上昇していった。

「私だけじゃありませんよ。だって、この学園にいる男の人は先生じゃないんですから。」

セックスの相手をして欲しいと思うのは当然じゃないですか」

普段のように、礼儀正しく、的確に要点だけを話す委員長

けれど、その内容は完全に常軌を逸している。

甘い吐息を吹きかけられて思わず顔を背けたが——顔を押しえられ、正面からジッと顔を覗き込まれてしまう。

「浅田先生は、私の気持ちを無視するつもりなんですか？」

「ち、違う……けど、君の言っていることは……くっ!!」

股間に触れていた西園寺の手が、ズボンの上からギューとモノを握りしめてきた。

思わず情けない声を上げてしまったのは、いつの間にか勃起してしまっていたペニスに刺激を受け、甘美な感覚が下半身を走り抜けたからだ。

まるで脳が沸騰しそうなほどの興奮だった。

「ほら、先生のオナチンも、私たちの中に入りたいて言ってますよ?」

「は、散してくれ……」

「そんなの嫌です。せつかく処女喪失のチャンスなのに」

「そうそう、先生にはたっぷりりと精液を出してもらわないと」

「はあ、これが男の人の匂いなんですね」

浅田がどれほど懇願しても、二人の女生徒は身体に張りついたまま離れようとしな

「ば、馬鹿……考え直せ!」

教え子たちに密着され、股間をまさぐられて勃起している。

この状況を消えなく思いながらも、浅田は崩れそうになる理性を必死に維持し、自分の中に種り始めている悪欲を抑え込み続けた。

「このまじやマズイ!」

生徒のほうから積極的に迫ってきたので肉体的関係を持ってしまった——などという言いわけは絶対に通用しないだろう。

早くなんとかしなければ、取り返しのつかない事態になる。

「うふふ……先生のこと、ガチガチに勃起しているじゃないですか、これって、私のことを一人前の女だと認めてくださった証拠ですよ?」

焦る浅田を余所に、西園寺は股間を撫でながら嬉しそうに呟いた。

「ち、違う、いい加減に散してくれ!」

「本当に拒絶するつもりなら、逃げ出せばいいじゃないですか」

「だが、君たちの力が強くて……」

「そうですか? 本当は逃げられるのに、わざと捕まってるんじゃないですか?」

「そ、そんなことは……」

「よく考えてください、浅田先生」

西園寺は妖艶な笑みを浮かべたまま、背伸びをして浅田の耳元で囁きかけてくる。

「ほら、私とセックスすること……北大路さんや、龍ヶ崎さんにオナチンを挿れて、射精することをイメージしてみてください」

「それは……」

「とても気持ちよさそうとは思いませんか? 楽しく……嬉しくはないですか?」

西園寺が突き出す言葉が、浅田の精神を徐々に壊していく。

股間の肉棒はさらに勃起し、三人の女生徒が潮らす熱い吐息に頭が朦朧としてきた。

「……これはどうしようもないこと……なんだ」

彼女たちから透れるのは、力尽くで払いのけるしかないだろう。

だが、教師である自分が女生徒たちに暴力を振るうわけにはいかない。場合によっては、肉体的関係を結んだ以上の問題に発展する恐れがある。

頭の中でそんな言いわけをしながら、本音は浅田自身も気付いていた。

西園寺が指摘するように、自分こそ、先のことを期待している。心の奥底にある情欲が、彼女たちと回響してしまっているのに、身体が動かなくなってしまう。

理性では駄目だと分かっているのに、身体が動かなくなってしまう。

「さあ……そうそう、先生のオナチンを見せてもらいますね?」

「さあ……そうそう、先生はオナチンを見せてもらいますね?」

びつたりと密着していた西園寺は、身体を消らせるようにして浅田の前にしゃがみ込む

と、ズボンのベルトを外して引き抜いた。
その様子を、北大路と龍ア崎が食い入る
ように見つめている。
「だ、駄目だ……やめろ！」
腰を引こうとした浅田を制し、西園寺は
期待に満ちた表情を浮かべながらフラスナ
ーを引き下ろし——ゆつくりとペニスを取
り出していった。



第二章

神宮学園

私立神宮学園。

日本でも屈指の名門女子校であるこの学園は、政界や経済界に大きな影響を持つ者た
ちの子女が集まるお嬢様学校でもある。

ミッション系の学園であることから、欧米にある学園との交流も盛んだ。
大学の教育制度を卒業して教員免許を取得するも、どこにも動機を見つけないことがで
きなかつた浅田真が、そんな名門校で教師として働くことができたのは、ひとえに恩師で
ある二条静恵のおかげだった。神宮学園の学園長を務めている彼女は、塾講師として、囁口
を渡していた浅田を教職に誘導してくれたのである。

「お久しぶりね、浅田くん」

学園長室で顔を合わせた静恵は、訪れた浅田をにこやかな笑顔で迎えた。電話やメール
でやりとりはしていたが、顔を合わせるのは実に三年ぶりのことだ。
高校時代の担任であった彼女の美貌は——当時と比べていさかも衰えていない。
日本人離れした、彫りの深い美しい顔立ちと高身長。

その見事なまでのプロポーションは、一流のファッションモデルとして活躍していたと
しても不思議ではないほどだった。
「昔話のひとつでもしたいところだけど……あなたも、明日からはこの学園の先生になる
んだからね。まずは気を引き締めなさい」

静恵は高級そうな机にもたれ、腕を組んだ姿勢で浅田を見つめてくる。
笑顔こそ浮かべてはいるものの、声色は真剣そのものだ。新任教師に活を入れるとい
うだけではなく、なにか重要なことを伝えようという雰囲気があった。

「はい……分かりました」
「最初は初任者研修を受けてもらうことになるわ。あ……それと最初に言っておくけど、
校内での携帯やネットの使用は禁止させてもらうから」

懇話する浅田に対して、静恵は思いついたようにそんなことを言った。
「そういえば、もらった資料にも書かれていましたね」
「数年前に在籍していた男性教師が女生徒の着替えやトイレを盗撮して、しかもその映像
がネットに流出するという事件が起ったの」

「もちろん普通の学園でも大問題だが、この神宮学園は名門女子校であるため、特にその
手の機関を嫌う傾向にある。教職員の多くが聖職に就いていることもあり、以降はより規
律を重んじるようになったのだという」。



「書類の中に、守秘義務契約書もあったのはそ
のせいですか」

「契約書に意味があるかどうかはともかく、そう
いったもので安心する親御さんもある。まあ学
園から出さない——というほうが効果的だけだ」

「え、どういふことですか」
「これも資料に書いてあったでしょう？ この学
園では在籍している三年間、許可なく学園外へ出
ることは禁じられているのよ」

入学した女生徒たちは、卒業までの間、基本的
に学園の敷地内で過ごすらしい。

豪華な寮が完備されており、セレブなりの娯楽
物もあるので生活には問題ないというが、外出許
可を取らない限り、学園から出られないという
は息苦しさを感じてしまう。

「まるで刑務所ですね」
「なんだか人事みたいだけど、それは教職員も同

「えっ!! そうなんですか?」
 「言っただけよ。あなたには学園内で生活してもらうって」
 「確かに聞いてますけど……まさか、外出禁止だとは思いませんでしたよ」
 「ずつと希望していた教職に就くことができたのはいいが、これからの生活を考えると、なんだか鬱鬱になってしまっている」
 「この学園で教師として働くことが、どれほどのステータスになるのか分かっていないの?」
 「たとえ教員生活に慣れていくというだけで……って、まあいいわ」
 「言葉だけでは利点を伝えきれないと思ったのか、静恵は途中で話を切り上げた」
 「とにかく、あなたにも規律は守ってもらうから」
 「分かりました。でも、ネットが使えないのは痛いですが」
 「どうしても必要なときは、教員室にある共用のパソコンを使いなさい。使用許可は私が、エリ」
 「寮内先生に申し出てくれればいいから」
 「教職員の間でめざしてあるシステムよ。ここの生活についても彼女が説明してくれると思うから、この後あなたは用務員室に行ってください」
 「用務員室?」

思わず首を傾げると、静恵は「あなたの宿舎」と当然のように言った。
 「だって、女性寮は使わせられないでしょう」
 「そりゃそうですけど……用務員さんには?」
 「この学園の管理は、寮内先生が統括するシステムたちだけで十分に成り立っているの。用務員を置く必要はないから、いまは余り部屋になってるわ」
 「なるほど……」
 「はい、それじゃ携帯を出して」
 「彼女はそう言う、上向きにした手のひらを見せ出してきた」
 「なんだか不意な気もしたが、学園の信用問題に関わることだと言われると、これからここで働く以上は黙ることもできない」
 「連絡しておきたい人がいれば、先に連絡しても構わないけど?」
 「いえ……大丈夫です」
 「交友関係が希薄なので、めばしい相手は目の前にいる静恵くらいしかない」
 「素直に取り出したスマートフォンを手渡した」
 「これでいいですか?」
 「よろしい。もう夕方だけど、ここにくるまでに食事してきて?」
 「いえ、街まで行って食べようかと思っただけです」
 「ええ、街まで行って食べようかと思っただけです」

学園から出ることを禁じられてはどうしようもない。
 渡された資料によると、校内にある食堂は朝と昼しか空いておらず、女生徒たちの夕食は寮内で支給されることになっていたはずだ。
 売店も朝早くから営業しているが、午後五時には閉店してしまうらしい。
 用務員室で終日暮らすのであれば、その品揃えが豊富だという売店で食料を仕入れ、自炊するのが必須ということになりそうだった。
 「今日のところは、寮内先生があなたのために食事を作ると言っていたわ」
 「え……そんなの悪いんです」
 「夕食にありつけるのは嬉しいけれど、まだ会ったこともない——しかも先輩となる女性教師に作ってもらうというのは、なんだか気が引けてしまう」
 「それじゃ、乾パンで済ませる? 確か寮内に災害用の備蓄が……」
 「いえ!、今回は寮内先生のご厚意に甘えたいと思います」
 「よろしい。じゃあ、このまま用務員室に向かう」
 「はい」
 久しぶりに再会した恩師との面談にしては短かったが、今回は「新任教師」として呼ばれたのだし、どうせ明日からは毎日のように顔を合わせることになる。
 指示された通り、浅田は素直に学園長室を辞しようとしたのだが、

「あ、浅田くん」
 「静恵が思わずという感じで呼び止めた」
 「……いえ、なんでもないわ。期待してるから頑張ってください」
 「自分の意見や思っていることをはっきりと口にする彼女が、めずらしく言葉を濁した」
 「……やっぱり、なにかあるんだろな」
 「昔からの知り合いとはいえ、学園長の権限を行使してまで採用してくれたのは、なにか内々にさせたことがあるからに違いない」
 「イジメ問題か、あるいは学級崩壊か」
 「いや、新任教師にそんな問題の解決を望んでいるとは思えないので、単に男手として必要とされたのかなかもしれない。いざれにしても、かつての恩師が自分を見込んで呼び寄せてくれたのだ、できることはなんでもするつもりだった」
 「じゃあ、失礼します」
 浅田は静恵に一礼すると、今度は学園長室を退出した。
 神宮学園の敷地は広大で、本校舎を中心として体育館、講堂、学生寮、そして教会などの施設が置かれている。

用務員室はそれらの施設から少し離れた場所——敷地の一番隅にあった。小さな戸建てだったが、他の豪華で洋装な設備に比べるとかなり質素な造りをしており、小洒落た部屋では安らげない。浅田にとっては好都合だった。小さいながらキッチンもあるし、以前に使用していた用務員が置いていったのだろうか、少し雑多な感じもしたが、どこか懐かしささえ感じられるほどだ。

「あら、浅田先生ですか？」

「室内を見まわしていると、キッチンから修道服に身を包んだシスターが姿を現した。おそく、この女性が静恵先生なのだろう。」

「あ……はい。浅田真です。本日でこの学園の教師になりました。」

浅田が驚いて話をすると、彼女はクッと笑った。

「あ、ごめんなさい。私はこの学園でシスター長をやっております。静恵、エリと申します。はい、とりあえずは。」

「もう少しで食事の準備ができますから、待っててくださいね。」

「あの、本当にごそうになつていいんですか？」

自分の部屋となる場所が——しかもシスターがいるということが不思議に思え、

なんとなく落ち着かない気分になる。

「ええ、私の仕事はこの学園の管理ですから、生徒たちに出す寮の夕食も、私の指示でシスターたちが調理して配っているんです。」

「そうなんですか。でも、静恵先生も……」

「エリで結構ですよ。」

「あ、はい……エリ先生も教師なんですよ？」

「ええ、臨時で教壇に立つこともありますが、いまは教職員をまとめる仕事をしています。明確な役職はありませんが教師のようなものではないでしょうか。」

「なるほど。」

学園長である静恵を補佐する立場にあるということだ。



「個人的にも、一茶先生とは学生時代からの友人でして……」

「ああ、そうなんですか。」

「それで先ほどはつい名前を口にしてしまった——ということなのだろう。」

「僕もそうですよ。一茶先生は僕が高校時代の担任の先生だったんです。ついでに言うと、教師を目指したのもあの人の影響なんです。」

「初対面の相手に喋りすぎのような気もしますが、互いに昔から静恵の知り合いであることに加え、エリの穏やかな雰囲気につられて多弁になつてしまつた。」

「まあ……私も学校の先生に影響されて教職を目指したんです。」

「じゃあ、僕と一緒にですか。」

「ええ、奇遇ですね。似た者同士と言いますか。」

彼女はそう言つて微笑みながら、室内にあるテーブルにランチョンマットを広げた。すでに料理はできあがつていたらしく、促されて椅子に座ると同時に、エリがキッチンから小鍋を運んできた。

「湯気が立ち上る美味しそうなシチューだった。」

「うおお！」

「ありあわせのものですけど……そんな目をギラつかせなくても晩御飯は逃げませんよ。エリは子供をあやす母親のような笑みを浮かべると、小鍋からできたのシチューを皿

に装つてくれた。誰かに作つてもらつた手料理は久しぶりだ。

「新任祝いです。しっかりと食べて、明日からの勤務に臨んでください。」

「は、はい……ありがとうございます！ いただきます！」

空腹には勝てず、浅田は感謝の言葉を口にして勢よく食事を始めた。

その様子をエリが嬉しそうに眺めている。食べる喜びに頬が緩んでいるのかと思うと、少し恥ずかしい気もしたが——彼女の作ったシチューは本当に美味しかった。

「えつと……ところで、明日から僕はなにをすればいいんでしょうか？」

「食事の献けながら、調整するように訊いてみる。」

「指導計画書を一茶先生に提出してもらいます。それと……いま、一年A組の担任が不在です。で、当面はそのクラスを見ていただくことになると思います。」

「新任の僕がですか？」

「担任の代行は私がしていますから、浅田先生は生徒の監視役と言いますか、副担任のような役割を果たしていただければ大丈夫ですよ。」

エリはそう言つて、持参していた紙を差し出してきた。

ずらつと名前が印字されているところからして、そのA組の名簿のようだ。しっかりと名前を記入しておけということなのだろう。

「クラス委員長である西園寺さんには、すでに浅田先生のことを説明してあります……」

ホームルームの前に紹介しておいたほうがいいですか？」

「できれば、お願いします」

「塾講師の経験があるとはいえ、教師として大勢の生徒の前に立つのは初めてだ。事前に足知った生徒がひとりでもいると心強い。それと……先生は確か、国語を担当なさるんですよね？ 学園で使われている教科書や資料なども、そのときまでにお渡しできるよう準備しておきますので」

「なにからなにまで、ありがとうございます」

浅田は礼を言うと、手渡されたクラス名簿に視線を落とした。

全員の顔と名前を完全に覚えるには少し時間が必要だが、明日までにはできるだけ頭に入き込んでおこうと考える。

長年の夢だった教師としての生活が、いよいよ始まろうとしていた。

⑥

翌朝。

浅田が万全に準備を整えて待っていると、始業十分ほど前にエリが用務員室を訪れた。

「遅くなって申しわけありません」

「いえいえ、無理を言ったのはこちらですから」

「さっそく紹介を済ませてしましましょう。クラス委員長の西園寺さんです」

「初めまして。西園寺書記です」

エリに紹介された女生徒は、浅田と顔を合わせると丁寧に頭を下げた。

神宮学園のシブシブな制服に身を包み、フレームレスの眼鏡をかけた——いかにも優等生という外見をした少女だ。

物腰もまろかく、これなら性格的にも衝突することはないだろうと安堵する。

「浅田です。よろしく」

「はい。よろしくお願ひします」

彼女は緊張気味の浅田に柔和な笑顔を向け、しつかりとした挨拶を返してきた。

「では、行きましょうか」

「はい」

先導するエリに従い、本校舎に移動して教室までの廊下を歩く。

まだ教師として正式に紹介されたわけではないのに、途中ですれ違う生徒たちは、浅田にも丁寧な挨拶をしてくる。

お嬢様学校だけに、しつかりとした教育が施されているのだろう。

それでも男性の存在がめずらしいのか、あちこちから遠慮がちな視線を感じた。

——こりや、思ったよりも大変かも。

数年前の事件以来、神宮学園に男性教師が着任したのは初めてだという。注目されているのは仕方ないが、相手は年頃の少女たちばかりなので、下手にはだされてしまわないよう気をつけなければならぬ。

特に今朝は、起きたときから妙に精力が満ちている感じがするのだ。

女生徒たちを決して性的な目で見ないように——と自分に言い聞かせながら、なるべく視線を合えないようにして廊下を歩き続けた。

「着きましたよ。ここがA組の教室です」

エリが足を止めると同時に予鈴が鳴り響いた。

すると、それまで廊下にはいた女生徒たちが、静かに各々の教室へと入っていく。廊下を走るような無作法者などひとりもない。

「いまからホームルームの時間になりますが……浅田先生のごは生徒たちが集まってくる分かりますので、少しここで待っていてください」

「ありがとうございます」

教室に入っていくエリを見送った浅田は、ふと思いついたように西園寺を振り返った。

「そういえば、前の担任の先生はどうしたの？」

「あ、はい……担任の先生は、『退任前』にいきなり辞められたんです。エリ先生からは、お家の都合でと聞いているんですけど」

「ふうん」

随分と急な話だと不思議に思いながらも頷いていたとき、教室に入ろうとしていた女生徒のひとりが、浅田の顔を見て驚いたように足を止めた。

「お兄ちゃん」

「……え？」

思いがけない呼びかけに驚いてみると、彼女は戸惑う浅田に近寄り、その整った顔を吐息がかかるほどの距離まで寄せてきた。

「やっぱりお兄ちゃんだ！　なんでこんなところに！！」

「あ、あの……君は？」

「クラスメートの伊集院さんです」

質問に答えたのは、目の前の女生徒ではなく西園寺だった。

彼女に伊集院と呼ばれた少女は、大きな瞳を輝かせ、懐かしそうな顔をしながらジッと浅田を見つめている。

「お兄ちゃんだよね？　絶対そう！　私のことを忘れちゃった？」

「伊集院さん、浅田先生とお知り合いなんですか？」

「はい」

「お兄ちゃん、浅田先生とお知り合いなんですか？」

「はい」

「お兄ちゃん、浅田先生とお知り合いなんですか？」

「はい」

「お兄ちゃん、浅田先生とお知り合いなんですか？」

「はい」

「お兄ちゃん、浅田先生とお知り合いなんですか？」

「はい」

「お兄ちゃん、浅田先生とお知り合いなんですか？」

「はい」

「お兄ちゃん、浅田先生とお知り合いなんですか？」